

対談シリーズ 2 Société Internationale d'Urologie

阿 曾 佳 郎

(東京大学名誉教授 藤枝市立総合病院院長)

吉 田 修

(京都大学名誉教授・日本赤十字社和歌山医療センター院長)

吉田：先生，今日はお疲れのところどうもありがとうございます
ございます

『泌尿器科紀要』は創刊以来45年になりました。今後さらに日本の泌尿器科の皆さんにもっと役に立つジャーナルにしたいと思って、いろいろな企画を考えております。京都大学泌尿器科学教室も、私の後継者が小川 修教授に決まりましたので、私は編集委員長を退いて小川教授が就任しました。私は名誉編集委員長として今後もお手伝いしようと思っております。この対談も新たに始めた企画ですが、今後ともよろしくお願い申し上げます

SIU について

きょうは国際泌尿器科学会 SIU の理事長をしていらっしゃる先生にいろいろお話をお伺いしたいと思います。まず SIU の歴史，もう100年以上になりますか。

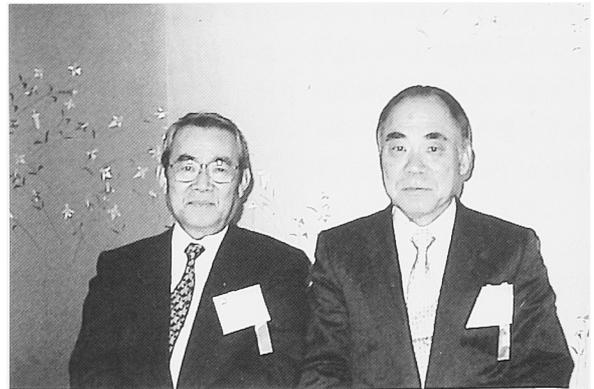
阿曾：100年にはなっていません。1908年，SIU の前身である Association Internationale d'Urologie として出発しました。それで3回学会を開催した後，第一次世界大戦になり一時中断されました。第一次大戦が終わって1921年に，今日の Société Internationale d'Urologie が出発しました。今度のインドの学会が，1908年の第1回の大会から数えて第25回目ということになります

吉田：その辺はもう一度後でお伺いしますが，どういふような発展の歴史があるのかということが1つと，今や21世紀に向けて国際化という言葉自体が死語に近くなっているような，そういう時代において日本の泌尿器科医にとって，国際学会というのは SIU しかないわけです

阿曾：その辺が先生，問題があるんですね。

吉田：その辺のことをまずお伺いしていきたい。それから現在の SIU が抱えている問題点，そして将来の展望。そして泌尿器科学，またわが国における泌尿器学会の代表的な先達として，若い人たちに与える言葉というようなことをお伺いしたいと思います

初めに先生，SIU の歴史，さっきちょっとお触れになりましたけれども，その辺からお願いいたします。



阿曾：1908年に発足した Association Internationale d'Urologie に続いて，Société Internationale d'Urologie は1921年に発足しています。総会を3年に1回ずつ開催して，今日に及んでいます。2000年からは更なる国際化の時代に向かって，2年に一度ずつやろうということになっています。最初はエリートの集まりだったわけです。ところが国際化が非常に進むようになって，単なるエリートの集団というのはおかしいんじゃないか，このソサイエティはもっともっとオープンにしなくてはいけない，ということで，シドニーでの1994年の総会のときに，この学会はオープンになりました。もちろん各国からの推薦があるということは前提としていますが，一応オープンになったわけです

これはこういう国際化の時代にやむを得ないことだろうと思います。当然そういう方向に向かっていくんですが，反対に非常に発展した国から発展途上国までありますと各国間ではいろいろ事情が違います。それが今大問題になってきているわけです

それで，もともとはこの学会の目指すところは泌尿器科に関係のあるあらゆる領域の分野について国際的な協力をして，国際的にお互いに切磋琢磨して勉強していくことです。それからもちろん国際的な親善を深める。その辺が目的だったわけです

それが今はそれに加えて大きな目的は，発展途上国を発展した国がいかに援助してやるか，それがこの国際泌尿器学会の大きな存在理由になってきているので

す あたかも国連や WHO がいろいろ発展途上国のお世話をするように。

一方では、そういうことをやるための莫大な資金が必要となります。これが問題となっています。しかし、これからはこの学会は国際間の援助に非常に重きを置くこととなるでしょう。

吉田：先生、もう少し詳しくお伺いしたいんですけども、SIU というのがフランスでできて、一番最初のころは私も記憶があるんですが、大変エリートの集団であった。ヨーロッパの学会というのは割合とエリートの集団というのがありますよね。そして閉鎖的である。それがある時期まではうまくいっていたのだと思うのですが、急にそれをシドニーから、今回先生が President になられてからかなりドラスティックに変えられた。ポイントはどういう改革なんですか。

阿曾：結局、今までは President と Vice President、それから General Secretary が主体となって会を運営していたわけです。そのためかなり独善的なところも見られました。会の運営としてはやりやすかったのかもしれませんが、独善的なところがありました。つまり、President や Vice President を出せない国からかなり、われわれの意見はどう反映させるのだという問題も出てきました。過去にもそういう意見があったんですが、学会をオープンにしたときによけいにそういう意見がはっきりと出てきたのです。

それでは President, Vice President 制の代わりに何をやるかと言えば、今度は Committee をつくって、Committee の Chairman が理事会を形成して、会を運営していくという、そういう方向に向かったわけです。

吉田：それはいわば学会の近代化みたいな気がするんですけどもね。今までのやり方があまりにも古すぎて、会員になりたくてもいろいろなバリアがあってなれなかったということもありましたよね、ある時代には。

阿曾：そうですね。

吉田：それがオープンになった。一方、あまりオープンになりすぎたというか、あまりにもデモクラティックになりすぎた。そこでいろいろな問題点が生じている。ただ、やはり先進国と言うと語弊がありますが、きちんとした組織が整っている国がリードし、あるいは場合によっては援助をするということをやっているか、あるいはいけないと思うんですが、SIU が目指しているもので、その他にミッションとしては何かあるんですか。

阿曾：それは今申し上げたんですが、それからもう1つ、先生、オープンになったというそもそもの原因として、もちろん会員の意見が強かったのですが、それ

と同時に泌尿器科に関するインターナショナル・ミーティング、アソシエーション、学会がたくさんできてきたことがあげられます。ESWL, International Consultation on Urologic Diseases (ICUD) とか。しかもそういった新しくできた国際学会というのはみんなオープンなわけです。そういうような状況の中で、やはりわれわれだけが segregate されているという状態ではいられなかった。それも大きな原因です。

昔は SIU のみが泌尿器科に関する国際学会だったのですが、今は違うと思うんです。今はたくさんの国際学会があって、その中で SIU のミッションは何かということになりますと、答えは大変難しくなります。以前は今独立しているような泌尿器科学関係の国際学会がカバーしている領域をすべて含んで、SIU が泌尿器科をリードするという形でよかったです。

ところが今まで SIU がカバーしてきた領域からそれぞれの別々の国際学会ができてきました。一方 SIU はそれらの学会と同じようにオープンにすることになったので、SIU のミッションを決めることが非常に難しい時期になったと思います。

そこで今までなかった SIU のミッションとして1つ、developing country と developed country の間のギャップを埋めるということが非常に強調されているんです。それは言葉で言うのは簡単ですが、いったい何から始めていいかということになると非常に問題です。

具体的には、できればインスティテュートを設立するとか、機械を提供するとか、それもいいんでしょうが、今現実に経済的に困っている SIU がそれはできないので、やはりできることと言うと developing country に developed country から優れた方が行って何かを教えろとか、あるいはカンファレンスに参加するとか、シンポジウムに参加するとか。そういうことだろうと思うんですね。それがギャップを埋める現実的には一番できやすい方法です。

それからさらには、これだけインターネットだ、Eメールだと発達した時代ですから、そういうテレコミュニケーションの手段を用いて、何か developing country に援助してやるということです。それはどこか developed country でシンポジウムを開き、テレコミュニケーションにより世界の主な中継点に転送します。そしてその中継点に developing country の人達が集まってもらうという方法も考えられます。

そういうできるところから始めて、次は地域の人を教育する施設をつくるというようなことを将来やっていったらと考えます。エデュケーションセンターをつくるか。そこまでは今はとてもできませんが、将来的にはそういうところを目指さないといけないでしょうね。

それから, さらにはインターナショナル ユニバーシティというようなものできてくればいいなと思っていますけれども。

そういう意味では各地でやっている SIU の旗を掲げたシンポジウムですね。今度日本でもやりましたけれども。そういうものの意味は大きいだろうと思っています。

吉田: SIU の総会を開くということも, これは必要なことでありますけれども, それだけではなくて他のアクティビティを重視していらっしゃる。そういうことを考えたいですね。

阿曾: そうです。昔はもっぱら総会を開くことに意義があったのですが, これだけテレコミュニケーションが発達してくると, 昔ほどの総会を開く意味はないわけですね。総会を開かなくてもコミュニケーションできますしね。飛行機だけでなく, テレコミュニケーションの発達した時代ですから, 総会だけ重要視する意味は随分薄れていると思いますね。日本の学会だってそうだと思うんです。

日本の学会にしても, 今まで泌尿器科学会は総会を開くこと, 総会を開いて何かカンファレンスをやったり, シンポジウムをやったりすることに意義を見つけていた傾向がありましたが, 私は日本の泌尿器科学会ももっと違う意味で, 例えば公正な薬の治験のことをやるか, もっと広い意味で医学教育のことにタッチするとか, そういう新しい方向に進んでいかないとだめな時代になっているのだと思います。

吉田: SIU の現在抱えている問題点というのも今のお話でよくわかりましたし, 将来の方向も大体示されているように思いますが, 基本は先生, SIU の会員 1 人 1 人がそういうミッションに向けて参加する。手弁当と言えいいのか, ボランティア精神というか, そういう気持ちで全体がレベルアップすることに協力するという基本が一番大事でしょうね。

阿曾: そうですね, それがないとこの SIU のメンバーであるということのメリットは何かということになってしまうんですね。

吉田: そうですね。アジア泌尿器科学会での SIU シンポジウムのときに, 先生に最初の presidential address をお願いしましたが, その時先生は, ケネディの言葉「アメリカがあなた方に何をやるかということよりも, あなた方がアメリカに何ができるかということを問え」と同じようなことだとおっしゃいました。まさにその辺ですね。

阿曾: そうですね。そういう考えがないと今の SIU のミッションを果たすことはできないでしょうね。

吉田: そうでしょうね。

阿曾: 逆に考えて, 単に発展途上国を援助することはいったい何になるのか, そんなものは自分の学問のた

めに何にもならないじゃないかと。そう考えてくると, SIU のメンバーであることの意義がわからなくなってしまいうんですね。

吉田: そうですね。基本的には奉仕ですよ。

阿曾: そうということですね。

吉田: ミッションをはっきり理解してほしいという気持ちを私は強く持っているんですけどもね。1 人 1 人がそれを持って, そして参加してほしいと。

阿曾: そうなんですね。どちらかと言うと若い先生方はその辺のところはわからない。何かをサブスクライブするのに安くなるとか, 学会に出るための費用が安くなるとか, そういうことに直接結びつけたがるのですが, これからの学会参加ということはそれだけではないんですね。それをわからないといけません。まあ意識改革ですね。

これからの泌尿器科

吉田: それが非常に大事なときにきていると私も最近痛感しているんですね。

SIU の話はだいぶ伺って, ますますご活躍願いたいと思いますが, さて先生は今までずっと泌尿器科学会の発展のために直接リーダーとしてやってこられてもう久しいのですが, 先生のお立場から将来の泌尿器科学, あるいは日本の泌尿器科医に何を望むかという, その辺のことをお聞かせいただけますか。

阿曾: やっぱり自分たちだけよくなるのではなくて, それ以外の人がたくさんいて世界は成り立っているのだから, 発展途上国, あるいは弱いものをいかに救ってやるかということに意識が向かないといけません。しょうね。

私たちが若いころはもっぱら学問, 自分の向上だけを目指していましたよね。アメリカに行ったり, あっちこっちに行って知識を吸収してきて, それで満足, 満足したかどうかわからないですが, そういうことがいいことだと思われていました。これだけ世界の交流が多くなって, 発展国と発展途上国の差が開いてくると, やはり私は発展途上国をいかに引き上げてやるか, 自分以外のことにどれだけ考えを向けられるか, それが日本の泌尿器科を向上させることにもなるし, 日本の立場もですね。日本人というのはどちらかと言うと, 今までは自分中心なんですよ。どうしても欧米に目を向けて国際的に発展することを目標とする傾向がありました。でもそれだけではまずいと思うんですね。

今度インドで総会をやることになっていますが, 日本はともするとああいうところを後ろで見て, 前は欧米の方に向いていたのですが, 途上国の方にも多少注意を向けませんか, これからの日本の値打ちが下がってきますよ。

ですから、そういう意味では学会も今までは先進国の大きな都市で開催して、いいホテルに泊まってやっていたのですが、それだけではまずいですよね。これからはもっと貧しい学会をやるようにしないと。そして貧しい国を見ることが必要です。それは泌尿器科だけじゃないです。あらゆる領域でそういう必要があるんです。そんな時代になってきたように私は感じていますけれども。

吉田：自利利他の精神が大切で、結局自分のことばかりを考えていると周りが大変なことになっているの気がつかないということがありますね。物事を俯瞰的に見るということも必要になってまいりますし。

泌尿器科の疾患も確かに老人が増えて随分変わってきましたし、われわれが泌尿器科医になったころからは随分変わってきました。やはり日本の中だけではなく、世界中でどういうふうに変化しているかということにも目を向けていかななくてははいけません。

阿曾：それがこれからは重要なことでしょうね。なかなか自分に利益がない、自分にとってはあまりメリットのないところに行って時間をつぶすということはやりにくいことですけれどもね。できにくいことです。少なくともそういう心がけを持つことは必要じゃないでしょうか。

吉田：経済的には日本は今不況だと言いますが、しかしこれだけ豊かな国になって、もう少し精神的なゆとりがほしいですよね。

阿曾：そういうことですね。

この間もインドに年次総会で呼ばれて行ってきましたが、やっぱり確かに大変ですよ。だけど、ああいうところに平気な顔をして行けるような努力をしないとイケないですね。

吉田：なるほど。本当の国際的というのはそういうことです。

阿曾：そういうことだと思うんですね。

吉田：アメリカ、ヨーロッパだけが国際じゃないですからね。まあ辛いことでしょうか。

阿曾：辛いことです。

泌尿器科の臨床研修

吉田：少し話題が変わりますが、インドの泌尿器科というのはあれだけ大きな国で、大変リッチなピープルから、本当に赤貧洗うがごとしの方々までおられるわけですね。そういう人たちの疾病もそれぞれ違うし、医療費も違うわけですね。非常に貧しい人たちの泌尿器科疾患、あるいはその治療というのはああいう国ではどういうふうに行っているのでしょうか。

阿曾：全部国でやっているみたいですね。私もインドの一番大きな国立の病院を見てきましたが、患者が多くて芝生の上に毛布を敷いて待っているような状態で

すね。病院といっても建物は立派ですが中は暗いですしね。廊下も狭いし。終戦直後の日本の病院のような感じだったですね。

だけど、われわれはもう年をとってしまいましたけれども、若い方々がああいうところに例えば3カ月でも6カ月でも行って、そして患者を診てくると、われわれがいかにリッチな環境でやっているかということが実感できると思うんですね。だからできれば私はああいうところに行くのも泌尿器科学の教育の一貫だろうと。泌尿器科学だけではなく、日本の医学教育はこれからいろいろ改革すると言われてはいますが、そういうところに行ってみることも大変必要なことだと思うんです。医学の勉強だけが勉強ではないわけ

吉田：そうですね。やっぱりそういう経験を通じて医者として、あるいは人間として、しっかりとした人生観なり人間観なりができてくる。それが一番大事なステップですよ。

阿曾：そういうことですね。

吉田：日本泌尿器科学会も随分発展して、会員が6千名を越えるような大きな学会になりました。そして誠に立派な総会をやっておられて、大変うれしくは思うのですが、やはり今先生がおっしゃったようなことはいつも皆さんがどこか心の中に置いていただきたいと思います。

阿曾：おっしゃるとおりですね。どちらかと言うと、まだこの日本の学会というのはもっぱら本当の医学の先端のことが中心になっているように思いますよね。例えば遺伝子治療とか。そういうことも大切だけれども、もうちょっと医学教育にも、例えば泌尿器科学会だって、これから研修2年必修化を控えて、泌尿器科の専門医教育をどうするのかとか。あるいは治験の問題、GCPだ何だと非常にうるさい時代に泌尿器科の学会としてどういう対応をするのかとか、そういう問題も含んで。それからもちろん、発展途上国にどう援助してやるのかとか。それは国際泌尿器科学会を通してでもいいんですが。そういう話題も出てくるような学会になってもらいたいですね。これは難しいですけども。

吉田：全く同感ですね。みんなその辺に強い関心を持って、熱心な参加が必要だと思いますね。2年後に卒後臨床研修必修化ということになる見通しが強いですが、そうなったときにその2年間のカリキュラムを泌尿器科学会としては十分に検討しておいて、それを早く初めから出さないといけないと思うんですが。

阿曾：そうなんです。そういうことに対してはどちらかと言うと非常に無関心な方が多いですね。

この間、誰かにちょっと聞いたら、2年間必修になれば、それは当然病院長所属になって一般的なことを

やるのだから、泌尿器科医としての課程には認められませんよ。それを終わってから5年間やらなければだめですよ。だけどそれもまた非常に見識が狭い話で、やっぱり僕はその2年間というのは将来泌尿器科専門医になるための基礎をやっているわけだから、それプラス3年ちゃんとやればよいので、やたらと期間だけ長くしてやるということは決していいことではないと思っています

吉田：そうですね。同じローテートするのでも、将来泌尿器科医になるためにその基礎になる臨床を身につけるためのローテートは、どこどこをどういうふうにローテートして、その期間はどのぐらいが望ましいかというのは十分に議論しなければならないですね。

阿曾：今からそのためには準備しておかないとね。今はあまりにも皆さんそういう点には関心がないみたいですよ。

吉田：こうして先生と二人だけでいくらワイワイ言っても始まんわけですよ。

阿曾：そうなんです。だから、この間も総会で言おうかなと思ったけれども、また年寄りのひがみ事になってもいけませんからね。

吉田：それは非常に大事なことですね。お互いに泌尿器科の将来を思えば時々苦言も呈さなくてはなりません。

阿曾：そういうことですね。

吉田：先生、今から私の阿曾になってもらっては困るので、相変わらず頑張っていたきたいと思います

今日はお疲れのところ本当にありがとうございます

対談を終えて

公立病院の院長という激職の上に、このように国際学会の理事長を務められるのは大変なことである。日本泌尿器科学会全体の一層のバックアップをお願いしたい。また、先生にはくれぐれもご自愛をお願いしたい。

(吉田)